

近代青森県を描いた吉田初三郎と今純三

—二人が描きたかったものは何か—

中園 美穂

はじめに

絵画など視覚資料で時代や地域の歴史を見る際に、よく利用されるのが鳥瞰図絵師である吉田初三郎が描いた作品だろう。例えば、青森県立郷土館は一九九九年（平成一一）に、「描かれた青森展」を開催し、三戸町や弘前市などの鳥瞰図（原図）や青森市の鳥瞰図（印刷折本）などを図録で紹介した。初三郎は、自身が創案した「鳥瞰的案内図」を「初三郎式鳥瞰図」と呼んだことでも知られる^①。

初三郎の鳥瞰図の形態は、肉筆による絹本彩色の「原図」と、折り畳み式で携帯に便利な印刷折本に大別され、両者とも横に長い。特に、印刷折本は近代ツーリズムを補完する実用性に富んでいる。大胆な誇張に圧倒される構図と描写だが、案内図として必要な文字情報が書き込まれ、観光地や交通体系がわかりやすく描かれている。彼の鳥瞰図は、当時最新の情報が描かれた記録性の高い作品なのである。このため特異な性質を持つ視覚資料でありながら歴史資料としても活用されてきた。

初三郎の鳥瞰図に関する研究は、描かれた内容や文字情報を読み解く

ことを中心に、鳥瞰図の比較検討や相違点の抽出、制作背景や経緯などを対象とする傾向が強い^②。

青森県内で記録性の高い視覚資料として忘れてはならないのが、青森県出身の洋画家・版画家である今純三の『青森県画譜』だろう。事実、『青森県画譜』に収録の「取残された花見客」が、昭和戦前の弘前観桜会を伝える図として活用された。『新青森市史』資料編七近代（二）では、口絵で「青森市新町通り夜景」を採用している^③。

このように活用されるのは、『青森県画譜』の作品が精緻で写実性に富む描写であり、純三自ら解説文を記し、制作年が判明する記録性の高い作品だからである。

『青森県画譜』に関する研究は、考現学と結びつけて論じられることがある。對馬恵美子氏によれば、純三にとって『青森県画譜』は「考現学と絵画を融合させたはじめての成果」だという。純三は、兄の今和次郎らの考現学の研究書に青森県内の風俗図を提供し、彼自身も執筆していた。考現学に最適な題材選びと画風や記録性を持つゆえ、純三の『青森県画譜』は歴史資料としても価値がある^④。

西日本に拠点を置いていた初三郎は、一九三二年（昭和七）に青森県八戸市の太平洋が一望できる種差海岸を訪れ魅了される。一九三二年～三五年にかけて、彼はアトリエ兼別荘の「潮観荘」を種差海岸に設けた。^⑥この間に、青森県内の鳥瞰図の原図が描かれ、印刷折本の鳥瞰図が発行された。実は、一九三三年一〇月～三四年九月は、純三の『青森県画譜』が各輯単位で毎月発行された時期に相当する。^⑦

つまり、初三郎と純三は、青森県を題材とする記録性の高い作品を、偶然にも同じ時期に発表した作家だった。両者の画風は全く異なるが、当時の青森県を描いた彼らの作品が、後世に当時の時代を理解するため材料（資料）として活用されたのは非常に興味深い。

同時期に初三郎と純三が青森県を題材に作品を制作した偶然に、筆者はとても強い関心と興味を持った。そこで本稿では、作品の種類や画風の全く異なる初三郎と純三について、どのような制作動機や背景があったのか。二人が興味と関心を持って描いた青森県像はどのようなものだったのか。彼ら自身が語った資料を含め考察したい。

一 吉田初三郎にとつての鳥瞰図

（一）なぜ青森県にやってきたのか

一九二七年（昭和二）に東京日日・大阪毎日両新聞主催の「日本八景」選定メディアイベントがおこなわれた。その結果、東北地方では青森・秋田両県にまたがる十和田湖が八景の湖沼部門第一位に決定した。日本八景の選定には国立公園の設置が想定されていたので、鉄道省が後援し、

八景選定の審査委員には、文系・理系など各種専門家が関与していた。^⑧同年一二月に国立公園協会が発足し、二九年に国立公園調査会が誕生した。国立公園をつくるための準備が本格化し始めたのである。

三〇年には国立公園を管轄する内務省衛生局が「国立公園候補地調査概要」を作成した。内務省が二一年度（大正一〇）から二八年度まで調査した国立公園候補地の施設や利用の現況、計画区域等の概要がまとまったのである。これによると、当時は一六か所の国立公園候補地が存在した。^⑨

三〇年四月、鉄道省に国際観光局が設置され、翌年一〇月に国立公園法が施行された。同法は、外客誘致に伴う海外に通用する壮大な自然景観を国立公園に選ぶ根拠となるものである。内務大臣の諮問機関である国立公園委員会では、国立公園設置のため審議が重ねられた。^⑩

こうした国立公園設置に向けた動向は、全国各地の国立公園協会や観光協会などの結成を促進するのに十分な影響を与えた。^⑪三一年六月、青森県では国立公園協会青森支部の発会式が挙行され、支部長を青森県知事がつとめた。青森支部は、県当局や運輸関係・各市町村・県内各新聞メディアなど官民有志たちが、十和田湖一带の国立公園化を早期実現させるため、国立公園協会の支部設置を有効と判断して創立された。発起人の一人には、東奥日報社社長の山田金次郎がいた。彼は青森新聞協会長でもあった。^⑫

三二年一〇月八日に、国立公園委員会の特別委員会により、十和田湖を含む一二か所の国立公園候補地が選定された。実は、一二か所の国立公園候補地が選定される同年の八月に、大阪毎日新聞社では国立公園の

候補地を空撮した写真集『蒼天に展く』を出版していた。巻末には内務省が極秘とする腹案まで載せており興味深い¹³。従来、十和田湖を見下ろす写真は、主に秋田県側の発荷峠や鉛山などからの眺望である。このため空撮の十和田湖を含む写真集の出版は画期的だった¹⁴。

初三郎は、大阪毎日新聞発行の雑誌付録で鳥瞰図を手がけており、彼と大阪毎日は無関係ではない。その大阪毎日が出版した航空写真は、初三郎の十和田湖鳥瞰図の制作に大きく役立ったのではない¹⁵か。

『蒼天に展く』が出版された三二年八月、初三郎は青森県八戸市を訪問する¹⁶。彼が鳥瞰図を制作するのは、「日本全国名所図絵の完成」のためだった。郷土の誇るべき史跡や伝説・文化を全国に広く周知させ、後世へ永久不滅の人文系の記録として名所と交通網の発達を伝えるための行為にほかならなかった。そのため初三郎の観光社では、鳥瞰図の出版こそが「全生命」であり、「図絵報国」の使命につながると考えていた。このように彼が考えるようになったのは、一四年（大正三）当時、皇太子だった昭和天皇が初三郎の「京阪電車御案内」を「奇麗で解り易い」と褒めたことに感激し、「聖恩」に報いようと決意したからである¹⁷。こうした背景があり、初三郎式鳥瞰図は日本の領土を巨視的にとらえ、首都東京と交通体系を関連させ、構図の中心部に郷土の風景や名所などを配置して微視的に描く作品になるのだろう。

一九二〇年代後半、初三郎と袂を分かった弟子であり、鳥瞰図絵師の金子常光が、東北地方の各地鳥瞰図を制作し、好評を得ていた。藤本一美氏は、東北地方が初三郎の「空白地」であるため、日本名所図絵社の金子常光らが活動し、それが初三郎の「あせり」になったと指摘する¹⁸。

しかし、初三郎には、「図絵報国」の使命と「日本全国名所図絵の完成」の大きな目的がある。金子らが先行して東北地方の各鳥瞰図制作を進める中で、彼は形勢を逆転できる時機をうかがっていたのではないか。

そうした初三郎自身と、国立公園設置が実現する段階が重なった三二年頃、東北地方の秋田・福島・八戸・青森・弘前の各市長が、初三郎に鳥瞰図制作を依頼したと考えられる。特に、秋田・青森・弘前・八戸には十和田湖探勝の出入口になる鉄道が敷設されている。新潟県に住む知人を見舞う目的があったとはいえ、三二年の夏、十和田湖を踏査し、初三郎は満を持して東北地方に足を踏み入れたのである¹⁹。

八戸市は十和田湖を含んだ八戸市中心の鳥瞰図を初三郎に依頼し、三二年八月に初三郎が下図写生のため同市を訪れた²⁰。「昭和八年度吉田初三郎先生作品譜」には、計六六六の鳥瞰図が列記され、東北地方は一三六のうちの青森県が計六六六だった²¹。市町村名や旅館名がある鳥瞰図は依頼者を推定しやすい。しかし、青森・秋田両県にまたがる十和田湖の鳥瞰図は誰が依頼したのかという疑問が浮上する。

（二）最新の国立公園を描く―『十和田湖鳥瞰図』―

一九三二年（昭和七）七月、八戸市や三戸郡各町村と秋田県北の鹿角地域（大湯や小坂など）が経済圏域を構成するため、青秋産業協会を結成し、発会式を十和田湖畔の休屋で挙行了。協会の会長は、八戸市長である神田重雄がつとめた。大湯・八戸産業道路の確立は圏域の産業経済を活性化させ、八戸の海産物と大湯方面の林産物の物流促進を意味した²²。協会は、青森・秋田県境に位置する十和田湖を中心とした国立公園

の指定が高まる局面で誕生したのである。

東北地方は自然資源を地域振興に結びつける東北振興運動の時代にあった。例えば、青秋横断鉄道の敷設をはじめ、八戸港を中心に青森と秋田を結ぶ産業開発の計画が陳情された。⁽²³⁾ 青秋産業協会の結成は、こうした東北振興運動の中に位置づけられる。

東京日日新聞の記事によると、青秋産業協会が初三郎に依頼した「国立公園十和田湖の鳥瞰図」の「原図」が三十二年一月に完成した。⁽²⁴⁾ このため協会を構成する青森県側の八戸市と五戸・三戸・田子の各町と倉石・戸来・斗川・上郷・猿辺・留崎・向の各村、五戸電鉄会社等が補助金を出して二万部の印刷折本をつくり、全国の観光関係方面への発送と、青森や秋田の有名旅館に備え置くことを決定している。⁽²⁵⁾

三十一年一月に、印刷折本『十和田湖鳥瞰図』が十和田観光会から一部二〇銭で発売された。⁽²⁶⁾ 『十和田湖鳥瞰図』の表紙に中湖展望道からの俯瞰（現瞰湖台の付近）が選ばれたのは、版を重ねる金子常光の十和田湖の鳥瞰図に描かれない最新の絶景だからだろう。御倉半島と中山半島の間に位置する中湖（なかのうみ）には、二重式カルデラの最深处がある。中湖展望道は十和田湖が自然科学の面からも国立公園に相応しい湖を示す絶好の場所だった。表紙選びから、鳥瞰図の権威者たる初三郎の思いがうかがえる。⁽²⁷⁾

『十和田湖鳥瞰図』では、中湖展望道から御倉半島を眺めた写真を掲載し、この展望道について「中湖絶壁上より中湖を脚下に俯瞰する道路。脚下千仞の底に中湖の蒼波を下瞰するその奇観は実に物凄く戦慄を禁じ能はざるものである。」と紹介している。⁽²⁸⁾ 中湖展望道は、三十一年秋の失

業救済事業で車道整備された、湖畔の宇樽部と休屋の間を結ぶ道路である。三四年八月に、鉄道省が運営する省営自動車がこの道路をバス路線にすると、初三郎が鳥瞰図表紙で紹介していた場所の付近にバス停が設置され、「瞰湖台」と呼ばれることになる。⁽²⁹⁾

『十和田湖鳥瞰図』には、三十一年一月に秋田県側の眺望名所である紫明亭に設置された「八景記念碑」が描かれている。日本八景のイベントを主催した大阪毎日新聞社と初三郎の関係の深さを感じ取れよう。⁽³⁰⁾

青秋産業協会の会長である八戸市長の神田と初三郎の結びつきは、初三郎が種差を「朝鮮の海金剛」より「遙かに優れた」「正に日本一の名勝」と絶賛したことから強固になった。これを受けて八戸市は、十和田湖を中心とする国立公園の指定区域に種差海岸を編入する運動を開始した。⁽³¹⁾ 三十一年一月には、種差海岸への誘客を意識した八戸観光協会を組織した。十和田国立公園区域の拡張運動は初三郎の与えた影響が大きい。しかし、初三郎が種差を「陸奥金剛」と名付けて鳥瞰図に描いたことで、県学務部長の矢野兼三は「一介の画家」が種差を「陸奥金剛」と命名したと考え、その使用に大反対した。加えて、八戸郷土研究会の小井川潤次郎が、種差の本当の名称は「白浜の岬」であると主張し、種差・陸奥金剛・白浜の岬の賛否三論の大騒ぎとなった。このことは種差の宣伝になったかもしれないが、結果として種差海岸地域の国立公園編入は実現を見なかった。それでも三四年一月に種差海岸は県指定の名勝に選ばれた。⁽³²⁾

他方、三二年から三年間かけて、初三郎は種差駅前の高台にアトリエを構え、のちにアトリエ兼別荘は「潮観荘」と呼ばれた。愛知県大山や

京都に拠点や作業場を置いていた初三郎が、太平洋を望む青森県八戸市の種差海岸に新たな拠点を築いたのである。³³⁾ 潮観ちようかん鳥瞰とつながるので、鳥瞰図制作に心血を注いだ初三郎に相応しい名前といえよう。

(三) 後世に歴史を伝える意志―「聖山名久井岳之図」―

初三郎は一九三三年(昭和八)に「聖山名久井岳之図」を描いている。「昭和八年度吉田初三郎先生作品譜」に「慶長天皇御事蹟名久井岳と三戸町」とあるので、これが当該の原図に相当すると考えられる。³⁴⁾

「聖山名久井岳之図」の原図(縦四一・五センチ、横一三三・五センチ)は、青森県三戸郡三戸町の三戸町立歴史民俗資料館に所蔵されている。しかし、印刷折本は確認されておらず、鳥瞰図の依頼者については言及されていなかった。そのため印刷折本が未確認である理由と、誰が鳥瞰図制作の依頼者なのか、なぜ名久井岳に「聖山」を冠したのか、その理由や背景を探りたい。

初三郎は、十和田湖一帯の鳥瞰図を制作するため、三二年一〇月、三戸町周辺の地勢調査などを実施した。³⁵⁾ 前述した『十和田湖鳥瞰図』には、「十和田湖探勝各路線」のうち、三戸口は東北本線三戸駅から半里で三戸町に到着し、斗内や貝守、田子町を経て、迷ヶ平を通り十和田湖畔(宇樽部)へ最短距離で達すると記されている。³⁶⁾ 三戸町に彼が立ち寄ったことで、『十和田湖鳥瞰図』に名久井岳山麓の「長慶天皇旧蹟地」が描かれ、「名久井岳は長慶天皇の御遺跡として著名なり。」と紹介されたのだろう。³⁷⁾

二六年(大正一五)一〇月、長慶天皇が即位したことを認める詔書が

宣布された。³⁸⁾ これを契機に、全国各地で長慶天皇の遺蹟に関する請願運動が盛り上がる。他方、大阪毎日新聞社では、二八年一月一日に『サンデー毎日』の第七年第二号付録として『歴代御陵巡拝図絵』を発行した。同図絵は初三郎が描いた鳥瞰図だった。その中で、第九八代の長慶天皇陵だけが「未定」のため、初三郎は完全な歴代天皇陵を描けなかった。「図絵報国」の使命を通じて皇室に畏敬の念を持つ彼は、長慶天皇陵の「未定」に強い関心を寄せていたのではないだろうか。³⁹⁾

三二年八月、陵墓研究者の尾上金城が長慶天皇陵墓の再調査をするため三戸町を訪問することになった。これが契機となり、名久井岳山麓の三戸町や留崎村(現三戸町)・向村(現南部町)など各町村長や有志者が団結して長慶天皇御遺蹟保存会を立ち上げた。⁴⁰⁾

しかし県内の長慶天皇御陵は、青森県内の中津軽郡相馬村紙漉沢にある上皇宮が参考地として宮内省の指定を受けていた。⁴¹⁾ これに対し、名久井岳山麓には、恵光院(長谷寺の塔頭の一つ。長谷寺が盛岡へ移ったので、寺跡は恵光院に改称)を中心に長慶天皇と深い関係がある遺蹟が点在し、長慶天皇陵の候補地が二つあった。一つは、三戸郡留崎村の泉山陵(稜威館ともいう)であり、もう一つは同郡向村にある有末光塚(うばこうづか)だった。そして泉山陵を推す糠部史談会と、有末光塚を推す三戸史談会が存在した。⁴²⁾ 初三郎が立ち寄った三二年一〇月の三戸町は、長慶天皇の遺蹟探究や起陵運動が盛んになってきた時期に相当したのである。

こうした状況から、名久井岳山麓に広がる長慶天皇の遺蹟を中心に描く鳥瞰図を初三郎に依頼したのは、長慶天皇御遺蹟保存会と推測される。

実は、長慶天皇御遺蹟保存会の会長は三三年四月から三戸町長をつとめた松尾節三である。⁴³「聖山名久井岳之図」が三戸町に所在するのも首肯できよう。

前述した上皇宮が御陵参考地として認定されているので、同保存会は積極的に鳥瞰図の制作を依頼しただろう。「図絵報国」の使命と皇室に畏敬の念を持つ初三郎は、『歴代御陵巡拝図絵』で長慶天皇陵を描けなかったため快諾したと思われる。鳥瞰図名に「聖山」を冠したのは、名久井岳山麓に広がる聖なる「遺蹟」の正統性をあらわすためと考えられる。「聖山名久井岳之図」には、長谷行宮・稜威館（糠部史談会が推す泉山陵）と有末光塚の御陵各候補地・恵光院など長慶天皇に関わる遺蹟とその名前が描かれている。

こうした鳥瞰図の特質から、長慶天皇御遺蹟保存会あるいは関係町村は、案内図や観光宣伝として印刷折本の発行を注文しなかったと考えられる。加えて、翌三四年秋は青森県が大凶作に見舞われ、印刷折本の費用を捻出するどころではなかっただろう。印刷折本が未確認である理由の一つになると思う。

三三年七月二五日～二八日、三戸町では第三〇回青森県産馬共進会が開かれた。共進会の開催に協力する三戸協賛会が記念誌『住谷のほまれ』を発行した。協賛会の会長が長慶天皇御遺蹟保存会の会長である松尾町長のため、『住谷のほまれ』⁴⁴の付録に「名久井岳麓聖跡 長慶天皇御陵考」が掲載されたのだろう。この付録は、長慶天皇御遺蹟保存会と糠部史談会による調査資料なので、泉山陵とする「稜威館」が御陵に比定されている。⁴⁵

興味深いことに、『住谷のほまれ』には、恵光院・月山神社・泉山御所（金鶏塚があり、「聖山名久井岳之図」にも金鶏塚が描かれた）・斗賀神社（「聖山名久井岳之図」では霊現堂とする）・三戸八幡宮・稜威館・有末光塚など「聖山名久井岳之図」に描かれた長慶天皇に関係する遺蹟が写真掲載されている。『住谷のほまれ』は、掲載された資料や、三三年の発行から見ても「聖山名久井岳之図」を読み解く重要な資料と考えられよう。⁴⁶

初三郎は、皇室ゆかりの地の鳥瞰図を描いて署名する際に、「謹作」や「謹画」と記し、ほかの鳥瞰図と区別する傾向が強い。⁴⁷「聖山名久井岳之図」では「敬寫」と記したので珍しい。「敬寫」には長慶天皇の遺蹟が残る「聖山」名久井岳への畏敬の念が込められていると思う。

鳥瞰図は、大胆な誇張を控えめにして、暗い緑色を基調に落ち着いた印象を与える。中央部の名久井岳が長慶天皇を象徴し、城山公園（三戸城跡）が南朝側の忠臣である南部氏をあらわすように見える。三四年は建武の新政から六〇〇年の記念年に相当し、八戸市の各神社では三月一日に建武中興記念祭を執行し、南部氏の居城だった根城跡では五月二日に築城六〇〇年記念祭が挙行された。四月二日には名久井岳山麓の恵光院で、長慶天皇御遺蹟保存会が長慶天皇五四〇年祭を主催した。式典後、三戸果菜市場で奉賛会が挙行された。「聖山名久井岳之図」には三戸果菜市場が描かれている。⁴⁸

藩祖南部光行以来の皇室への忠誠を永久に顕彰するため、四〇年一〇月に、皇紀二五〇〇年記念と光行糠部入国七五〇年を記念し、城山公園に南部公忠誠顕彰塔を建立することが決議された。その結果、翌四一年

四月に設計図が完成し、落成は秋の予定だった。「聖山名久井岳之図」の城山公園には南部公忠誠顕彰塔が加筆されている。加筆は、四一年四月以降と推測される。「聖山名久井岳之図」には、最新情報が描かれていたことになる。⁴⁹ 初三郎には「図絵報国」の使命と後世へ人文系の記録として残したい意志があり、依頼側にも後世に歴史を伝える意志があったからだろう。その意味で「聖山名久井岳之図」は山麓の町村の歴史や文化を反映する、生きた鳥瞰図だったと考えられる。

二 今純三にとつての「青森県画譜」

(一) 民衆に芸術を届ける―制作の意図―

一九三三年（昭和八）三月に、今純三（一八九三年～一九四四年）は、図画科教授嘱託をつとめた青森県師範学校を退職した。理由は青森「県下の萬象を版画」で表現する「青森県画譜」の制作に専念するためだった⁵⁰（以下、「青森県画譜」を「画譜」と略記する）。

純三は、青森県弘前市出身の洋画家・版画家である。東京に在住した彼は、洋画家の岡田三郎助に師事し、早稲田工手学校の夜学の建築科を卒業した。一九年（大正八）の第一回帝展に出品した「バラライカ」など油絵の各作品が入選していたため、青森県出身の洋画家の「第一人者」として知られた。二三年、関東大震災後に青森県に戻った。⁵¹

「画譜」は、青森県最大の新聞社である東奥日報社が三三年一〇月～三四年九月に毎月発行した。内容は、県内の景勝地や街の風景、公園や神社・仏閣、各種行事や風俗をあらわした計一〇〇点の作品である。作

品の原画は六種の版画技法で制作された。未詳の技法が一点あるものの、石版が五七点、多色石版が二三点、銅版が一点、コロム石版が三点、砂目石版が三点、銅版石版併用が二点である。各作品には署名と制作年・作品名が示され、解説も付された。⁵²

純三は、三三年六月から始まる『東奥日報』夕刊の連載小説「海峡」の挿絵を担当した。そして「海峡」を執筆した東奥日報記者の竹内俊吉に、翌三三年一月、「画譜」の制作を相談し、芸術家が後世へ残す仕事として、是非やりたいという強い思いを訴えていた。⁵³ 郷土の自然と人文の「真相」を描写して系統的に並べた「画譜」をつくれば、世間の利益になるだろうと考えたのである。⁵⁴ 一方、兄の和次郎による『考現学採集』等に掲載した郷土の風俗図が断片的であり、勤務する県師範学校の郷土教育については思うところがあり、連載小説「海峡」の挿絵では十分に郷土の風物の特質を描けなかったという。⁵⁵ こうした過去の作品への後悔なども「画譜」の題材選びに結びついたと考えられる。

純三は、東京で洋画家に師事し、舞台芸術と関わり、資生堂の意匠部に属した。そして青森市の印刷会社に勤め、石版印刷の本格的な技術を習得した。三三年四月、過去に得た「技術を総合して一つの新しい仕事」に就いてみると、「世の人のために尽すべき責務がある」と気付いたという。⁵⁶ 「技術を総合して一つの新しい仕事」とは「画譜」の制作活動の意味しよう。

版画とは、純三曰く、肉筆の絵画に対し「印刷の方法を介して造られた絵画」である。このため版画技術と印刷技術は密接だった。事実、彼は石版画と銅版画を研究しているので、手元には平版と凹版印刷の製版

に十分な機械があり、平版印刷の製版方式の一部分について特殊技法を持っていた。⁽⁸⁷⁾

しかし右記の各事情からは、「画譜」を版画で表現する必然性がわからない。そのため版画で表現しなければならぬ理由を、純三の言葉から探ってみよう。

二四年四月二日付と五日付の『東奥日報』に彼が書いた「民衆的芸術としての版画」(上・下)の記事が掲載された。この記事は、翌五月に弘前市の「角は呉服店」で、彼の作品展覧会を開催するため掲載されたのだろう。記事には、彼の芸術論が展開されている。⁽⁸⁸⁾

純三によれば、美術は社会の変化を反映する「時代精神の現れ」であり、現代は「民衆的芸術」の時代である。民衆的芸術とは、各家庭で油絵の小品を飾ることや、「版画芸術」の隆盛が強まっていることだと指摘する。彼の示す版画芸術とは、銅版のエッチングを筆頭に、「芸術的良心」で制作した木版や石版なども含むという。このため版画を、最新の印刷術やフォト・グラビアなど「営業的」なものとは全く違う「純芸術的」なものだと訴えた。版画が最も民衆的芸術であり、盛んに受容されるのは「純正芸術」が安価で広く一般に提供できるからである。

彼は、人びとに「よき芸術を捧げたい心から」油絵とエッチング制作に励み、自分の作品が近いうちに家庭の中に飾られることを期待していた。事実、純三の作品展覧会では、油絵のほかに銅版や石版の作品を展示し、家庭内に小品を飾りたい者の注文に応じる意図があった。

こうした芸術論から推測すると、版画で表現されたのは、彼自身の「芸術的良心」で制作する「民衆的芸術」に「画譜」を位置づけたため

と考えられる。そのため、「画譜」は、最も「民衆的芸術」である版画として、多くの人びとに提供したい作品になるのだろう。

「画譜」の制作にあたり、純三は各地の写生や、版下の描写、解説文の編纂という「三方面」を一人でおこなった。彼は「画譜」を「普通に流行の単なる原画複製の画集では無い」と述べている。確かに版画は原版から複数刷れるため、印刷物ないし複製品と考えることができる。版画と印刷は、複製技術でもあった。⁽⁸⁹⁾彼のいう、単なる原画複製の画集ではないとは、どういう意味なのか。

実際の「画譜」は、印刷会社の高速機械で技術者が印刷している。しかし純三は、石版印刷の技術を持ち、版画制作の面からも印刷工程に詳しい。このため純三自身が原画をもとに「印刷の原版」をつくり、印刷の仕上がりを確認し、細心の注意を払っていたことを「私独自の方式」と言っていた。この「画譜」に収録された一枚、一枚は複製品ではなく、「私の作品そのもの」であり、この点に「画譜の生命がある」と主張したのである。⁽⁹⁰⁾つまり、原画から単に大量印刷した画集ではなく、決して印刷会社に任せっきりにしていない、と伝えたかったのだろう。

だからこそ、彼は自製の転写紙を使って大部分の版下を石版用の特殊クレヨンやペンで描写し、版下数は多色印刷によって「三百数十」に達したと述べたのである。「画譜」の各輯解説で、各作品の技法を(一)内に示すのは、題材に応じて版画の技法を積極的に駆使した純三の原画そのものと認めてもらうためだろう。⁽⁹¹⁾「画譜」を原画複製の画集ではないと純三が宣言したくなる所以である。「画譜」の計画自体は、彼が短縮した結果、作品数を一年間で計一〇〇点とした。⁽⁹²⁾

(二) 最新の青森県像を残す―東奥日報社のねらい―

「画譜」は予約発行の形式をとり、予約者には「画譜」を入れる桐箱を贈呈する特典がついた。定価は一五円とされた。計一〇〇点の作品は第一輯―第一二輯に分けられ、一九三三年（昭和八）一〇月から毎月一回発行され、翌三四年九月の第一二輯で終了した。作品の大きさは、新聞紙面の約半分だった。⁽⁶³⁾

発行した東奥日報社側の視点を考慮して「画譜」を考えてみると、最初に注目したいのは新聞連載小説の自社分析である。従来、『東奥日報』の連載小説は、東京を中心とする題材であるため、「地方的興味に欠けていた。このため、三二年六月から連載する同社記者の竹内による小説「海峡」は、青森県を舞台に、多くの登場人物が県人であるため画期的だった。挿絵は「県画壇の第一人者」で、県の「生活風習」を研究する純三が担当した。同社では、竹内と純三が青森県人であるため、「郷土的特色」を十分にさせると期待した。純三自身は、県を舞台にした小説なので「郷土の風景や風俗、人物の性格其他の表現」に力を注ぐ気構えだった。⁽⁶⁴⁾「画譜」の刊行は、郷土の特色や地方的興味、県人が注目された時期に相当したと考えられる。

「画譜」に専念するため県師範学校を退職した純三に対し、東奥日報社は、三三年四月から編集局嘱託として彼をむかえて給料を支払った。第一二輯には、付録として同社の山田金次郎社長の「青森県画譜終刊に当りて」と純三の「作者の言葉」が添付された。⁽⁶⁵⁾

東奥日報社側の意志は「青森県画譜終刊に当りて」からうかがえる。そこでは郷土青森県で同社が実践中の各種事業を、山田社長が紹介し、

理念を披瀝している。出版事業をはじめ、芸能大会や相撲大会など文化事業の後援や、同社の実践する事業群が列記されていた。出版事業の中に「画譜」は位置づけられたのである。⁽⁶⁶⁾

三三年九月一〇日付の紙面に「青森県画譜刊行趣旨」を掲載した同社は、最近郷土に関する研究が著しく盛んになっており、過去を知るためには現在をよりよく知らねば「知る」という意義をなさない。その意義を全うする資料として現在の青森県を正しく写した地図と、この地図の上に位置する自然・人文のよき「画譜」が必要と訴えた。

地図とは、青森・弘前・八戸の各市街図が付いた四色刷りの「最新青森県地図」である（以下、「地図」と略記する）。山田社長から依頼された純三が「地図」を作製した。詳細な交通体系、主要な市町村の人口数、名所・旧跡や特産物などがわかる「独創的」で精巧な作品である。東奥日報社は、紙面の一二段組の実施など社業進展の記念と、長年の購読に対する感謝をこめて、同年一〇月一日付で一斉に愛読者へ「地図」を無料贈呈したのである。⁽⁶⁷⁾

「画譜」と「地図」を併読させ、最新の青森県像を県民に周知させる意図が東奥日報社にはあった。「画譜」が立体的に青森県をあらわし、「地図」が平面的に青森県をとらえるものとされたからである。微視的な立体図の「画譜」と、巨視的な平面図の「地図」が、不可分の関係であることを意味しよう。⁽⁶⁸⁾

同社が毎年発行する『東奥年鑑』と、『青森県総覧』で県勢や県の歴史を周知させるように、視覚資料として「画譜」と「地図」で最新の青森県の姿を提示した。こうした出版事業を通じて青森県の過去・現在・

未来を県民に把握させようとしたに違いない。⁽⁷⁰⁾

「画譜」の刊行中に、同社は、創業四五周年と、一万五〇〇〇号発行という記念をむかえた。このため三四年春から、「画譜」の完成を含む各種の記念事業をおこなった。「画譜」全一二輯を合冊製本し、創業四五周年記念のため「地図」を添付した『青森県画譜』を、全国の計七五の著名図書館へ寄贈したのである（以下、「画譜」と略記する）⁽⁷¹⁾。

寄贈理由は、「わが郷土」青森県を一般に紹介し、純三の「画風」と、青森県の様相を「永久不朽」にするためだった。このため『画譜』完成の意義とは、東奥日報社の出版ないし記念事業を総括し、全国の図書館を通じて後世へ伝え残すようにしたことと考えられる。だからこそ『画譜』の巻頭「青森県画譜終刊に当りて」で、山田社長はこれまで自社が実践した各種事業を紹介したのである。⁽⁷²⁾『画譜』は純三の作品であるとともに、東奥日報社の作品でもあったのである。

三 二人の作品から見えるもの

一九三二年（昭和七）九月から、東奥日報社は第二回東奥美術展に出品する在京・在県各美術家のアトリエを巡ってインタビューした記事「アトリエ巡り」を連載した。在県美術家の筆頭が純三である。彼はそこで「今若い人が言つてゐるシウルリアリズムには反対です、私は正直な写真から来る迫力を尊重します。」と述べた。⁽⁷³⁾

「画譜」を描く純三の写生に、二度同行した竹内俊吉は、純三から「一木一草が大切に、一筆といえども粗雑に描けば全体に影響してしまう。

しかも対象は実在しなければならない」と聞かされたと述懐している。⁽⁷⁴⁾
こうした特徴を持つ純三の作品と、大胆な誇張が持ち味の初三郎式鳥瞰図は全く異なる画風だが、二人には共通点ないし類似点がある。

一つ目が十和田湖の新たな眺望名所を題材とした点である。「画譜」第一〇輯（三四年七月）の「十和田湖風景」は、御倉半島と中山半島の間に位置し、足下に中湖を望む金屏風（現瞰湖台の付近）からの「俯瞰」である。純三の「十和田湖風景」は、初三郎が「十和田湖鳥瞰図」の表紙に選んだ中湖展望道からの俯瞰とよく似た絶景なのである。三四年八月に鉄道省の省営自動車の十和田線が開通し、ちょうど「十和田湖風景」に描かれた景色が眺望できる付近に、バス停「瞰湖台」が設置される。三四年七月の発行は東奥日報社の計画だと推定されるが、開通直前の発行とは興味深い偶然である。⁽⁷⁵⁾

興味深い偶然は、『十和田湖鳥瞰図』が三三年一〇月に発売され、「画譜」の刊行が省営自動車の十和田線の開通計画と重なる点も含む。同年同月、鉄道省が青森駅から八甲田山麓や奥入瀬溪流を経由し、十和田湖畔の子ノ口から休屋、そして生出に到着する、のちの十和田線について諮問会議を開いたからである。⁽⁷⁶⁾これ以降、十和田線は実地踏査などを経て、翌三四年八月に開通し、その翌月に「画譜」が第二二輯で終刊した。二つ目は、鳥瞰図を得意とした点である。鳥瞰図は初三郎の代名詞だが、濱田正二氏によると純三も鳥瞰図が「特技」だった。純三は、「画譜」に公園や神社・寺院など少なくとも計一八点を精緻な鳥瞰図で表現した。このうち銅版の鳥瞰図は四点を数えた。⁽⁷⁷⁾なお、アトリエ兼別荘を建てた初三郎の拠点というべき種差海岸からの展望を、純三が「画譜」

におさめているのは興味深い。⁽⁸⁶⁾

三つ目は、印刷が不可欠な作品を制作した点である。「画譜」は、純三が制作した原画をもとに、彼自身が印刷の原版をつくって、印刷会社が高速機械で刷った作品である。「画譜」制作に際し、彼は版画と印刷会社それぞれの印刷工程に関わっていた。

初三郎の鳥瞰図は、肉筆の原図をもとに、印刷折本が制作される。益田啓一郎氏によると、印刷折本は初三郎が経営する観光社出版部で刷られた。初三郎は、複数の弟子を使い、印刷技術の進化に合わせて意識的に画風を変化させていたという。石版印刷から大量印刷が可能なおフセット印刷へ、製版では最新のカラー写真製版を試みたからである。印刷技術の向上による工程の短縮が、青森県八戸市の種差海岸へアトリエを移転させる要因にもなったという。⁽⁸⁷⁾

四つ目は、大衆ないし民衆に対する芸術作品を意識した点である。初三郎の芸術信条は、万人が見て楽しみながら理解できるものを作品の生命とすることである。そのため初三郎式鳥瞰図の印刷折本は、万人が楽しみながら理解できる構図や図案を駆使した案内図へ進化したと考えられる。⁽⁸⁸⁾

純三は、「民衆的芸術」の最たる版画で「画譜」を制作した。理由は、芸術家が後世に残す仕事として、「みんな平等に絵に親しむことができるように」「よい絵を安価で大衆に提供する」ためだった。⁽⁸⁹⁾そのため彼の「版画芸術」である「画譜」が、県内で最も購読者数の多い東奥日報社から発行された意義は大きいだろう。

初三郎は、独自の技法で描いた鳥瞰図を、自ら初三郎式鳥瞰図と呼ん

だ。純三は「画譜」の制作工程を「私独自の方式」と宣言した。印刷折本の鳥瞰図にせよ、「画譜」にせよ、両者は印刷を通じた作品である。しかし、印刷物は肉筆より格下に位置づけられやすい。彼ら自身、印刷を通じた作品がどのように評価されるか熟知していたはずである。⁽⁹⁰⁾だからこそ、独自の技法で作品を制作したことを誇ったのだろう。

芸術作品とは、自らが創作した技法で制作した作品を意味するはずである。両者の画風や技法は全く異なるが、広く一般に向けて、わかりやすく郷土の歴史や文化を描き、作品を後世へ伝え残そうとすることが、彼らの芸術のあり方だったと考えられる。

おわりに

初三郎が描いた県内鳥瞰図や、純三の「画譜」が、時代を反映する作品と位置づけられるのは、最新の情報が表現された以外に、作品の依頼者の要望や意図が制作の背景や動機に影響を与えるからである。このため、依頼者を推定するのは、作品を理解するうえの基盤となる。

彼らの芸術論からは意外な共通点ないし類似点を垣間見た。初三郎の大衆を意識した芸術信条と純三の「版画芸術」に伴う作品の普及には、印刷技術が不可欠だったと考えられる。特に、版画家である純三にとって印刷は単なる複製技術ではなかったはずだ。のちに銅版の製版技法と印刷技術を通じて、さらに芸術表現を追究したからである。⁽⁹¹⁾

他方、一九三七年（昭和一二）以降、鳥瞰図は国防や防諜の観点から制作を控えなくてはならなくなった。初三郎は従軍画家として戦地の鳥

瞰図を描いたが、四〇年には絵はがき作家に転向する。⁸⁴⁾

戦後、初三郎式鳥瞰図の忘れられた時期があった。しかし、日本古地図学会の師橋辰夫会長や各会員の熱心な研究活動が実を結び、初三郎式鳥瞰図は再評価され、研究が蓄積されるようになった。

一方、東奥日報社によれば、戦災により「画譜」の「原画が焼失」し、「当時の現著も希少」となってしまったので、七三年六月、自社の創刊八五周年記念として『青森県画譜』を「完全復刻」した。⁸⁵⁾つまり、三四年版の『画譜』と、復刻『青森県画譜』の両製本が存在するわけである。当時の郷土の歴史や文化を伝える作品は、研究活動や復刻などを通じて後世へ伝え残されてきた。断続的とはいえ、彼らの芸術のあり方は継承されていることを意味しよう。

一九三〇年代初めの青森県は、十和田国立公園指定の前夜である。初三郎と純三のほかに、十和田湖を描いた人物が複数存在する。本稿では日本画や写真などを対象としなかった。今後の課題として、これらの作品と十和田国立公園を総合的に論じてみたいと思う。

註

(1) 『描かれた青森』（青森県立郷土館、一九九九年）七三～七五頁。吉田初三郎「如何にして初三郎式鳥瞰図は生れたか？」（『旅と名所』創刊号『観光』改題第二二号、一九二八年八月）。初三郎がこの論稿を『旅と名所』の創刊号で披露したのは、自身の鳥瞰図が完成の域に達したと自負したためだろう。

(2) 前掲註（1）吉田「如何にして初三郎式鳥瞰図は生れたか？」。

(3) 初三郎の鳥瞰図研究は多くの蓄積がある。これまでの研究成果を総括したものとして、益田啓一郎「吉田初三郎と鳥瞰図の世界」（『港湾』第九六号、二〇一九年六月）がある。このほか、近年の研究成果に、武田周一郎「神奈川県鳥瞰図」の作成過程と利用の実態」（『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第四六号、二〇一九年一〇月）や、田中祐未「吉田初三郎と印刷折本『旭川』（旭川を中心とする名所交通鳥瞰図）」（『日本研究』第六六集、二〇二三年三月）などがある。国際日本文化研究センターでは「吉田初三郎式鳥瞰図データベース」をインターネット公開した。加えて、劉建輝ほか編集『吉田初三郎鳥瞰図へのいざない』（国際日本文化研究センター、二〇一九年）も発行している。青森県内では、八戸市を中心に研究が進展している。例えば、八戸市博物館では、初三郎の鳥瞰図の特別展を二〇〇六年に開催し、『特別展「吉田初三郎と八戸」図録』（八戸市博物館、二〇〇六年）を発行している。このほかに、鳥瞰図コレクションで有名な八戸市の八戸クリニク街かどミュージアム（小倉学館長）や、種差観光協会の柳沢卓美会長などの研究活動がある。八戸市の初三郎式鳥瞰図については、藤本一美「吉田初三郎の八戸市の鳥瞰図類について」（『八戸市博物館研究紀要』第二一号、二〇〇七年三月）に詳しい。

(4) 今純三『青森県画譜』第一～二二輯（東奥日報社、一九三三年～三四年）国立国会図書館デジタルコレクション、最終確認日二〇二三年一〇月三〇日。以下、〔国会図D.C.〕と略記する。長谷川成一監修『弘前城築城四百年』（清文堂出版、二〇一一年）七一頁。口絵四四「新町通りの夜景」（『新青森市史』資料編七近代（二）、青森市、二〇〇六年）。

(5) 純三に関する研究には、濱田正二「わが思い出の青森県画譜」全一〇回（『東奥日報』一九七三年二月二三日付～三月一七日付）、『日本近代銅版画と今純三展』（青森県立郷土館、一九九二年）、對馬恵子「今純

三の「風景画」考」(『青森県立郷土館調査研究年報』第二一号、一九九七年三月)、同右「考現学と今純三」(『今純三・今和次郎展』青森県立郷土館、二〇〇二年)などがある。『青森県画譜』の風俗図「乞食の風態」(第八輯・六四)は、今和次郎ほか編「考現学採集」(建設社、一九三一年)〔国会図D C〕で、純三自身が紹介した「青森の乞食」の画と文章を活用する。両作品を比較し、風俗図「乞食の風態」の解説を読むと、この風俗図が「青森の乞食」を更新した作品であることがわかる。また「風俗図 乗物いろいろ」(第一〇輯・八〇)には、一九二八年の記録が利用されている。

- (6) 前掲註(3)『特別展「吉田初三郎と八戸」図録』八頁。一九三二年二月～三四年二月の間に、印刷折本として青森市のほか、弘前市、八戸市、十和田湖、七戸町の鳥瞰図が発行された。

- (7) 前掲註(4)『青森県画譜』。

- (8) 毎日新聞社編『毎日年鑑 一九二八』(毎日新聞社、一九二七年)七九六～七九八頁〔国会図D C〕。

- (9) 「国立公園候補地調査概要」(内務省衛生局、一九三〇年)〔国会図D C〕。

- (10) 「第二次国立公園委員会総会の記」によると、国立公園委員会は、候補地の選定について、各委員が実地視察や踏査のほか、会議を一六回も開催していた(『国立公園』四(一一)、国立公園協会、一九三二年〔国会図D C〕)。

- (11) 宮城県仙台市に本社がある河北新報社では、一九三〇年七月から東北一〇景の選定イベントを実施した。契機は、国際観光局の設置などによるものだった(『河北新報』一九三〇年七月一日付)。

- (12) 国際観光局編『全国観光機関調』第二回(国際観光局、一九三三年)〔国会図D C〕。『東奥日報』一九三三年三月一九日付、六月二二日付。

- (13) 前掲註(10)『国立公園』四(一一)。一二か所の国立公園候補地とは、

①阿寒、②大雪山、③十和田、④日光、⑤日本アルプス、⑥富士、⑦吉野及熊野、⑧大山、⑨瀬戸内海、⑩阿蘇、⑪雲仙、⑫霧島である。大阪毎日新聞社写真班撮影ほか『蒼天に展く』(大阪毎日新聞社、一九三二年)〔国会図D C〕。付録に一〇か所の国立公園の特質なども掲載している。

(14) 例えば、青森県史デジタルアーカイブシステムが公開する近代の十和田湖の絵はがきの中で、湖を眺望する地点は、発荷峠や鉛山など秋田県側からが多い。

- (15) 矢内一磨「吉田初三郎―その生涯と作品―」(『パノラマ地図を旅する』堺市博物館、一九九九年)によると、初三郎は現地を実地踏査し、複数のスケッチを基本に「測量地図、航空写真、関連資料」を総合して原図を構想するという(四九頁)。航空写真は鳥瞰図制作のため有益な材料になると考えられる。

- (16) 『河北新報』一九三二年八月三日付(周宇屋編『吉田初三郎資料スクラップ集No.4』所収。以下、スクラップ集No.4と略記する)。スクラップ集には、新聞に掲載された彼の鳥瞰図など関連記事が貼付されている。貼付された右の記事の原紙を、『河北新報』のマイクロフィルムで確認したところ、該当記事はなかった。これは、ほかの貼付記事でも同様の事例が見られた。新聞の縮刷版やマイクロフィルムには通例として最終版が残され、先に地方へ頒布された初版刷りなど早い版はマイクロフィルムに残されない(中園裕『新聞検閲制度運用論』清文堂出版、二〇〇六年、四三、七〇、八六、一一六頁)。このため、原紙を確認できない貼付記事は貴重な記事となる。

- (17) 前掲註(2)。「青森県五戸町 観光社東北支社 関根康平の挨拶状」(『吉田初三郎 関連資料』八戸市立図書館蔵。『日本パノラマ大図鑑』(宇治市歴史資料館、二〇一四年)六六～七一頁)。

- (18) 前掲註(3) 藤本論文(三三頁)。

(19) 吉田初三郎「東北の別天地」(広瀬操吉編『画房随想』信正社、一九三七年、三六六、三六七頁(国会図D C))。県庁所在地の福島市には、磐梯国立公園協会が置かれ県知事が会長である(前掲註(12)『全国観光機関調』)。しかし磐梯及吾妻国立公園は一九三二年一〇月の候補地指定から外されている。

(20) 『河北新報』一九三三年八月三日付(スクラップ集No.4)。

(21) 「昭和八年度吉田初三郎先生作品譜」(前掲註(17)『吉田初三郎関連資料』)に見える青森県関係の計六点とは、「東北第一の新興都市八戸市」「東北第一の味覚料理石田家旅館」「弘前市」「国立公園十和田湖」「馬の都七戸町」「慶長天皇御事蹟名久井岳と三戸町」である。

(22) 『奥南新報』一九三三年七月一九日付。

(23) 中園裕「東北振興」(「東北」の成立と展開)岩田書院、二〇〇二年。

(24) 『東京日日新聞』一九三二年二月一八日付(スクラップ集No.4)。

(25) 同右。

(26) 『八戸毎日新聞』一九三三年一〇月二六日付(スクラップ集No.4)。記事には「十和田観光社」とあるが「社」は「会」の誤植だろう。

(27) 『十和田湖鳥瞰図』(国際日本文化研究センター「吉田初郎式鳥瞰図データベース」所蔵)。「十和田湖鳥瞰図」の発行所は、青森県三戸郡五戸町の十和田観光会である。金子常光の『十和田湖名所図絵』(一九二五年八月、同右)の表紙は秋田県側の発荷峠からの眺望だが、三二年四月(第八版)の『十和田湖』は御倉半島の千丈幕などが表紙を飾った。『十和田湖』では、中湖側に「展望台」の文字が記されたのみである。左記の最終確認日二〇一三年一〇月三〇日。

<https://iif.nichibun.ac.jp/YSD/detail/002239200.html>

<https://iif.nichibun.ac.jp/YSD/detail/005538343.html>

<https://iif.nichibun.ac.jp/YSD/detail/005516745.html>

(28) 前掲註(27)『十和田湖鳥瞰図』。

(29) 金子の『十和田湖名所図絵』と『十和田湖』を比較すると、前者の鳥瞰図には中湖展望道が描かれていないことに気付く。

(30) 前掲註(27)『十和田湖鳥瞰図』。中園美穂「青森県史の玉手箱 一三」「毎日新聞」青森版、二〇二〇年八月二四日付。

(31) 『東京朝日新聞』一九三三年九月三〇日付、一〇月一二日付(スクラップ集No.4)。

(32) 『東京朝日新聞』一九三三年一月二二日付(スクラップ集No.4)。古舘光治「種差海岸と国立公園」(「はちのへ市史研究」第七号、二〇〇九年三月)。

(33) 前掲註(19) 吉田初三郎「東北の別天地」三六八頁によると、「私はその後、この草庵を、『潮観荘』と名づけ、今では、夏の避暑を兼ね、一門畫作の別天地としてゐる。」と書いている。『東京朝日新聞』一九三二年二月二二日付(スクラップ集No.4)。

(34) 前掲註(21)「昭和八年度吉田初三郎先生作品譜」。

(35) 『はちのへ新聞』一九三三年一〇月九日付(スクラップ集No.4)。初三郎の作品と三戸町の関わりは、相馬英生「三戸町に埋もれていた明治から昭和の文化再発見」(「広報さんのへ」第五五一号、二〇〇七年七月)に詳しい。

(36) 前掲註(27)『十和田湖鳥瞰図』。

(37) 一九三三年六月に発行された印刷折本『八戸市鳥瞰図』でも名久井岳山麓の「長慶天皇御遺蹟」を描いている。

(38) 『官報』号外、一九二六年一〇月二二日付(国会図D C)。

(39) 「歴代御陵巡拝図絵」の裏面には、第一二三代の大正天皇までの歴代天皇や皇后などの御陵を巡拝する交通案内が記載されている。前掲註(2)。

- (40) 編集兼発行者・松尾節三『住谷のほまれ』（発行所・三戸協賛会、一九三三年七月二五日発行）。「聖山名久井岳之図」には三戸町・留崎村・向村の家並みが描かれ、長慶天皇御遺蹟保存会が名久井岳山麓の町村で構成されていることがうかがえる。東奥日報紙上では一九三二年七月一日付から、尾上金城の「東北地方長慶天皇御陵候補地の調査」全三〇回の連載が始まった（『東奥日報』一九三二年七月一日付〜八月二七日付）。同年九月初旬から約二〇日間、三戸町などを訪れた尾上は、再び『東奥日報』で「長慶天皇の御陵に就いて青森県下の新発見」全一六回を連載する（同右、一九三二年一〇月六日付〜十一月二日付）。
- (41) 一九一五年の大正天皇来県を記念し、青森県が発行した『青森県写真帖』は、中津軽郡相馬村紙漉沢（現弘前市）の上皇宮を御陵参考地として紹介している。
- (42) 尾上金城「東北地方長慶天皇御陵候補地の調査 二七」（『東奥日報』一九三二年八月二三日付）。同右「長慶天皇の御陵に就いて青森県下の新発見 一」（同右、一〇月六日付）。「名久井岳麓聖跡 長慶天皇御陵考」（前掲註（40）『住谷のほまれ』）。
- (43) 北村芳太郎『三戸郷土史』（歴史図書社、一九七九年）六四頁。前掲註（42）「名久井岳麓聖跡 長慶天皇御陵考」。
- (44) 『東奥日報』一九三三年七月二六日付二五夕刊、二八日付二七夕刊、二八日付。前掲註（40）『住谷のほまれ』掲載の「三戸協賛会事務分担表」に松尾節三が三戸協賛会長として載っている。
- (45) 前掲註（42）「名久井岳麓聖跡 長慶天皇御陵考」二頁。前掲註（43）『三戸郷土史』では、三戸史談会の説が採用され、長慶天皇の御陵を有末光塚とする（三四頁）。
- (46) 前掲註（42）「名久井岳麓聖跡 長慶天皇御陵考」には、松尾節三らが一九三一年〜三三年の間に計四回、「長慶天皇御陵墓御事蹟調査方請

願」を宮内省（現宮内庁）へ上申した記録が載る（三一頁）。

- (47) 「謹作」には、一九二八年の『歴代御陵巡拝図絵』（京都名所大鳥瞰図）や、二九年の「伊勢岡神宮鳥瞰図」（神宮徴古館蔵）がある。「謹画」には、二四年の「高千穂名所図絵」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）がある。

- (48) 『東奥日報』一九三四年三月一三日付、一四日付、四月二四日付三三夕刊。『奥南新報』同年五月一八日付、二五夕刊。八戸市方面で主に購読される『奥南新報』は、建武中興六〇〇年記念号を南部師行が憤死した五月二二日に合わせて発行した新聞である。

- (49) 『東奥日報』一九四〇年一月一日付。藤本一美氏は、『写真で見る三戸町の百年』（三戸町、一九八九年）が「聖山名久井岳之図」の制作年を一九四一年としたことについて、「昭和八年初三郎作品譜」（墨封筒付葉書にも）に三戸町が掲載されていることや、鳥瞰図の画風を根拠に一九四一年作に疑問を呈している（吉田初三郎の鳥瞰図原画一覽『古地図研究』第三〇七号、二〇〇〇年三月）。『写真で見る三戸町の百年』は一九三三年の制作以降、部分的な加筆があったことについて触れていない。しかし、『東奥日報』一九四一年四月一七日付一六日夕刊の記事には、鳥瞰図に描かれた塔とよく似た塔の図が掲載されている。三戸町教育委員会の野田尚志氏のご教示によれば、実際に南部公忠誠顕彰塔は建立されなかった。野田氏によると、南部公忠誠顕彰塔のほかに、一九三三年当時には見られない名称や建造物が加筆修正されていた。例えば、「向村国民学校」の名称や、四〇年に設置された三戸塾などである。筆者も「聖山名久井岳之図」を見て、加筆修正の部分があることを確認した。

- (50) 「県下の萬象を版画」とは、純三の妻せつが書いた日記内容の一部である（『今純三作品集』刊行委員会編纂『今純三作品集』東奥日報社、一九八二年、一六一頁）。

- (51) 『弘前新聞』一九二四年五月一九日付。今純三「春の日の述懐」(『東奥日報』一九三三年四月一六日付「サンデー東奥」第二二一号)。
- (52) 『青森県画譜』は第一輯より第一〇輯までが各八点、第一輯と第二二輯が各一〇点の計一〇〇点である。コロム石版や砂目石版・銅版などは、主に第一輯から第五輯に収録された。第六輯以降は石版と多色石版が多数を占めるようになる。
- (53) 純三が竹内に「画譜」制作を相談した三三年一月とは、小説「海峡」連載終了の翌月である(『東奥日報』一九三三年九月一〇日付「サンデー東奥」第二三二号)。竹内俊吉「海峡」全一六三回(『東奥日報』一九三二年六月一八日付一七日夕刊〜二月二九日付二八日夕刊)。純三が描いた挿絵には、県庁通りや青森港・弘前公園の本丸跡や土手町・尻内駅ホームや鮫・浅虫温泉・岩木山・五所川原の乾橋などがある。
- (54) 今純三「作者の言葉」(前掲註(4)『青森県画譜』)。
- (55) 同右。「画譜」には、『考現学採集』に掲載された風俗図がある(前掲註(5))。
- (56) 前掲註(51)「春の日の述懐」。上記によれば、東京から帰県し、荒んでいた純三に対し、早稲田大学教授である兄の今和次郎が手紙を送る。兄の手紙で忠告と叱責を受けた彼は「真面目な生活」を知るため印刷会社で働いた。
- (57) 今純三『版画の新技术』(ジブ社、一九五〇年)三六頁(国会図書館DC)。
- (58) 前掲註(50)『今純三作品集』一六〇頁。前掲註(54)。
- (59) 前掲註(53)「サンデー東奥」第二三二号の中で、純三は「十年前に東奥日報紙上で創作版画の歴史や其価値其将来などを論じた」と述べている。それが、今純三「民衆的芸術としての版画」である。油絵の巨匠は同時に銅版のエッチングの大家と述べ、版画芸術界の巨星としてゴッダ・ミレー・ロートレック等を挙げた。五月、弘前市の「角は呉服店」で開

- 催する純三の作品展覧会には、帝展入選作品の油絵「バラライカ」のほか、銅版画が一〇数点ほど出品された。銅版画には「浅虫の海」や「天守閣」など県内の風景、関東大震災による「上野のバラック」などがあつた(前掲註(51)『弘前新聞』)。「上野のバラック」の原版は「大震災風景(バラック小屋)」だろう(戸村茂樹・對馬恵美子「今純三銅版画原稿の修復について」の報告)『青森県立郷土館調査研究年報』第二四号、二〇〇〇年三月、一四三頁)。
- (59) 今井良朗「複製―印刷技術史からみるリトグラフ―」(『リトグラフ石のまわりで』展覧会図録、武蔵野美術大学美術館・図書館、二〇一八年五月、<https://imaizimp.jp/wp-content/uploads/2020/07/ltiho.pdf> 最終確認日二〇二三年一〇月三〇日)。今井氏によると、日本に輸入された石版印刷は当時最新の複製印刷技術だった。濱田氏は「画譜」を「絵画の表現形式としては石版画で版画形式のオリジナリティーを生かし」た作品と評している(前掲註(5)濱田「わが思い出の青森県画譜一」『東奥日報』一九七三年二月二三日付)。「石版画」とは、石版印刷であり、平版による印刷を意味する。
- (60) 前掲註(53)「サンデー東奥」第二三二号。前掲註(54)。「画譜」は、青森市米町(現本町)の松尾石版所(松尾幸次郎)で印刷された。松尾石版所は著名な印刷所である(『青森県印刷史』青森県印刷工業組合、一九八二年、三四頁)。東奥日報社側も原画の制作、解説文の作成、「氏の特技たる美術石版の刷出」まで純三が一人でおこなったと述べた(山田金次郎「青森県画譜終刊に当りて」前掲註(4)『青森県画譜』)。
- (61) 前掲註(54)。前掲註(57)『版画の新技术』三六頁。版画は自ら下絵を描いて版をつくって刷る創作版画と、原画を複製する目的の複製版画に大別される。純三は、複製版画は芸術の部門に属さないとし、両者の区別について、版画技法を積極的に駆使した絵ならば、創作版画と認

められるだろうと説いた。

- (62) 前掲註(54)。興味深いことに、計一〇〇点を八名で制作した版画作品が存在した。関東大震災以降の復興で急速に変化する首都東京の様相を、木版の創作版画で制作した『新東京百景』である。『新東京百景』は、卓上社を結成した版画家の恩地孝四郎や平塚運一など八名が、一九二九年から始めて、三二年に全一〇〇景の頒布を終えていた。作品は創作版画倶楽部から限定五〇部で会員へ頒布された。創作版画であるため、「著作兼印刷者」が版画家自身となり、「画譜」との違いが明白である(版画・恩地孝四郎ほか『新東京百景』平凡社、一九七八年)。純三を師と仰ぎ、彼のアトリエで石版や銅版の技術を覚える版画家の関野準一郎は当時青森中学校の生徒であり、卓上社の八名を「当時の中心的版画家」で、「戦慄」を覚えるほどだったと述懐している(関野準一郎「新東京百景の八人」『毎日グラフ別冊 版画で見る懐かしの東京』毎日新聞社、一九七六年六月)。なお、恩地と純三には、同じ時期に東京の独逸学協会中学校(現獨協高校)に在学していた興味深い話がある(綿貫不二夫「今純三とエッチング」『資生堂ギャラリー七十五年史』資生堂、一九九五年)。
- (63) 「青森県画譜刊行趣旨」(『東奥日報』一九三三年九月一〇日付)。
- (64) 『東奥日報』一九三三年六月一日付。
- (65) 東奥日報社側は「画譜」という大きな仕事を「お頼みする以上」は儀礼的なお礼ではいかなと考え、純三を編集局囑託としてむかえた(竹内俊吉「青森県画譜」と考現学」前掲註(50)『今純三作品集』)。「青森県画譜終刊社告」(『東奥日報』一九三四年九月二五日付)。付録は、ほかに「青森県画譜各輯別及郡市別内容目録」がある。
- (66) 山田金次郎「青森県画譜終刊に当りて」(前掲註(4)『青森県画譜』)。
- (67) 前掲註(63)。「最新青森県地図刊行座談会」(『東奥日報』一九三三年八月三一日付)。同右、八月二七日付、一〇月一日付。「地図」は第一万

四七六五号付録である。「地図」の編集発行と印刷は、東奥日報社の川崎文男が担当した。

- (68) 前掲註(63)。

(69) 「画譜」には「地図」と照合するように青森・弘前・八戸三市と東中南北の各津軽郡、上北・下北両郡、三戸郡の景勝地や街の風景、名所などがおさめられた。

(70) 東奥日報社長 山田金次郎「序言」(『青森県総覧』昭和三年、東奥日報社)。東奥日報社では、節目に新規の出版事業を展開した。例えば、一九二八年一月一〇日に昭和天皇の即位大典があり、一二月には同社が創立満四〇年をむかえるため、大典奉祝と創業四〇年記念を合わせ、『青森県総覧』と『東奥年鑑』を編集発行することを決めた。『東奥年鑑』は二八年一〇月に発刊された。以降、毎年発行され、主に県勢の現状を列举的、統計的に表示した。『青森県総覧』は一月に発行され、主に同社の発刊以来四〇年間の県勢の振興や県民発展の出来事を系統的、歴史的に記述した。『東奥年鑑』と『青森県総覧』は、過去から現在の県勢を知悉し、将来のために大いに反省・奮励させるために発行された。このため、山田社長は、同一の目的を持つ『東奥年鑑』と『青森県総覧』の併読を推奨した。

(71) 「二万五千号記念 第二十五号」(『東奥日報』一九三四年一月三日付)。前掲註(66) 山田「青森県画譜終刊に当りて」。

(72) 同右。寄贈先の一つである帝国図書館の『青森県画譜』を、国立国会図書館がデジタルコレクションで公開している(前掲註(4)。「画譜」の巻頭には、第一二輯の付録だった山田社長の「青森県画譜終刊に当りて」が置かれた。純三の「作者の言葉」より前にあるのは、『画譜』が東奥日報社の意志で発行されたからだろう。

(73) 『東奥日報』一九三一年一〇月四日付三夕刊。記事には、純三と妻

せつ、そして三人の子供をアトリエで撮影した家族写真が掲載されている。

(74) 前掲註(65) 竹内「青森県画譜」と考現学」。

(75) 「十和田湖風景」第一〇輯・七三(前掲註(4)『青森県画譜』)。前掲註(27)『十和田湖鳥瞰図』。

(76) 鉄道省の省営自動車十和田線は仙台鉄道局の管内である。一九三三年一月に鉄道省の会議で諮問されて以降、運輸局長・青森県知事・内務省・仙台鉄道局などが十和田線開通を促した(『東奥日報』一九三三年一月五日付、一九三四年八月二日付)。

(77) 前掲註(5) 濱田「わが思い出の青森県画譜 七」(『東奥日報』一九七三年三月九日付)。前掲註(4)『青森県画譜』。

(78) 「種差海岸風景」第一輯・八二(前掲註(4)『青森県画譜』)。興味深いことに、新版画で著名な絵師の川瀬巴水(かわせ・はすい)が一九三三年九月―十一月に北海道や東北地方を旅行し、国際観光局の招聘で十和田湖を版画で描くため来県した。一月に八戸市の蕪島や種差海岸等を視察している(『奥南新報』一九三三年一月二二日付)。

(79) 印刷折本の『十和田湖鳥瞰図』の大きさは、国際日本文化研究センターのデータを参照すると、縦二〇センチ・横一〇〇センチである(前掲註(27))。益田啓一郎「印刷技術の進化和初三郎作品」(益田啓一郎編『美しき九州』海鳥社、二〇〇九年)。益田氏によると、観光社出版部が京都の和多田印刷だった。

(80) 前掲註(2)。

(81) 「」内は、純三の妻せつが書いた日記の内容である。日付は、純三が県師範学校を辞職した翌七日の朝である(前掲註(50)『今純三作品集』一六一頁)。せつは、純三の画業の「最大の理解者」であり「優れた助手」だった(対馬恵美子「日本近代銅版画と今純三」二〇五頁、前掲註

(5)『日本近代銅版画と今純三展』。

(82) フランス帰りの洋画家であり、初三郎の恩師である鹿子木孟郎(かのごぎ・たけしろう)は、初三郎にボスターや案内図を手がける応用美術家への道を誘導する際に、日本の美術家は社会や民衆に対する応用美術を「恥辱」と見ていると批評した。だが当時の初三郎でさえ広告や看板などの応用芸術を「ペンキ屋」と貶めた(前掲註(2))。ただし、それは彼が初三郎式鳥瞰図を確立する以前の話である。一九二七年、帝展に創作版画の出品がようやく認められた。版画が絵画より重要視されていなかったことを示唆するように興味深い。

(83) 一九三五年以降、純三は、絵はがき大で一組三枚の「エッチング小品集」を発行し始め、「エッチング奥入瀬溪流連作」の制作に本格的に取り組んだ。(前掲註(5) 対馬論文(一九九七年、一〇二―一〇七頁)。こうした作品が制作されたのは、銅版のエッチングが最も「民衆的芸術」であるとし、一般によい芸術を届けたいという純三の思いのあらわれだろう。

(84) 『別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図』(平凡社、二〇〇二年)九五頁。

(85) 『東奥日報』一九七三年一月二六日付。復刻の『青森県画譜』には、「地図」が含まれなかったようだ。一九四五年七月、純三の妻せつが自分の命と引き換えに、青森空襲から純三の作品や原版を守った(前掲註(81) 対馬論文、二〇五頁)。

(なかぞの・みほ 弘前大学非常勤講師)